

評価項目		本年度の活動(具体的な手立て)	指標	達成状況	成果と課題	学校関係者評価	今後の改善点
学力保障	授業改革 授業計画	①2年～6年でCRTを実施し、学力状況を分析検証して、指導計画に反映させるなど、指導の改善と授業改革に取り組む。 ②授業改革と学力評価について研修をすすめる。 ③学習規律の徹底と学習環境の整備	①学力調査の分析検討委員会を実施する。 ①指導案に客観的データを記載する。 ②一人一回以上授業公開する。 ③発表の仕方や声の大きさ等の掲示物を全校統一する。 ④学習環境の整備に努める。	①5年、1月20日CRT実施。2～4年2月3日実施予定。該当学年の担当者が中心に分析予定。 ①公開授業の指導案に、レディネステスの結果やCRT結果を記載した。 ②一人一回以上の授業公開を行なった。(2/7の公開で終了) ③発表の仕方や声の大きさ等、学習に関わる掲示物を全校で統一し、児童への意識づけを行った。 ④各学級の教室環境整備について、セルフチェック表で確認し、整備を努めた。平均値(8.5/10)	①レディネステスやCRT結果等の客観的なデータをもとに、一人ひとりの子どもへのきめ細かな指導方法について、研修を重ねて、授業改善につなげた。 ①全教師が授業公開することで、日々の授業改善の意識向上と改善事項の確認ができた。また、初任者の研修も含め、計8回の指導主事を招聘しての研修により、授業に学ぶ研修を進めることができた。 ③④「特別支援教育の視点を生かした学力保障」の方向を定めることができたが、環境整備や授業規律の指導等が十分には行っていない。	○授業改善、指導力をめざした全教師による公開授業は意欲的で良い。 ●CRTやレディネステスを十分分析して、児童の学力向上に活かしてほしい。また、中学校との連携で共有し、分析・検証ができるようになるのではないか。	・評価規程の作成 ・セルフチェック表をさらに活用した学習環境整備、授業規律の徹底 ・学習準備と家庭学習の定着を図る手立てを家庭と連携して実施 ・学習状況の把握・分析を小中連携で行うことを検討 ・全校体制による読書活動の推進 ・新学習指導要領の全面実施に伴い、行事のさらなる精選を行い、主なものは年度当初に計画
	少人数指導	①1・2年を少人数編成にすることにより、すべてのクラスを2クラスにすることによって、きめ細かな、いそいそとした指導をする。 ②特別支援教育を視点と取りわける授業づくりに努める。	①②少人数の強みを生かし指導計画の工夫、改善をする。	①全学級を少人数編成し、ひとり一人の児童の実態に応じて、きめ細やかな指導ができる。保護者アンケート結果(子ども学習のつまづきが早期発見できる71.9%。教師の目が行き届き、きめ細かな指導ができる83.7%。教師と子どもひとりのふれあいの時間が増える65.0%) 児童アンケート結果(授業がより落ち着く71.3%、学習に集中しやすい63.2%) ②校内研修をとおして、全校体制で取り組むとともに、4・6年において特別支援教育の視点とたTTによる指導を実施した。	①児童アンケート結果より「少人数だと勉強に集中しやすい」「授業の密度が上がるとの意見も記述されており、学習効果の高さで教師とともに児童も少人数編成を望んでいる。少人数編成への児童賛成率98% ○保護者アンケート結果からも「子どもたちによつたりと懐いてもらえる」「じつり丁寧に勉強を教えてもらえる」等、少人数編成への保護者の賛成率98%であった。一方で「教師が高まらなると学力の定着は困れない」という指摘もあったが、成果は多く今後も少人数級編成の要望を継続する	○少人数教育は、保護者、児童のアンケート結果を見るまでもなく、子どもたちそれぞれの個性の把握、きめ細かな指導ができる等、メリットが大きい。予定面での困難さはあると思うが、ぜひ全学年で継続していただけるよう要望したい。 ●特別支援教育の視点を生かしたあいまのきめ細かな指導の徹底	・きめ細かな行き届いた教科指導、学級経営と児童理解 ・QJを活用した学級づくり ・特別支援教育の視点を生かしたあいまのきめ細かな指導の徹底
	学習ボランティア活用	①算数科を中心とする学習支援ボランティアの活用を図る。 ・チャレンジタイム(4年～6年の算数補充授業)を設定し、学力の定着をはかる。 ・読み聞かせボランティアを活用する。 ・家庭・園工・総合的な学習などでボランティアの活用をはかる。	年間のべ200人	①263事業、年間のべ人数264。 算数科を中心に、国語・社会・家庭科等で学習支援ボランティアの活用を図った。学級通信・学校だより等により、ボランティアサポート状況の保護者や地域の人々への周知が図られた。(保護者アンケート結果:96.1%)	○算数科では低学年での丸付けや中学年で分度器やコンパス使用の学習で効果的な支援をいただき、今後の指針となった。チャレンジタイムについては、コーディネーターにより、適切な支援メニューを配置できた。 ●算数科における高学年での活用にも努める必要がある。 ○家庭科、生活科、総合学習等においても効果的な支援をいただきたい。	○学習支援ボランティアの方々の積極的な活動で、充実した取組になっている。今後もぜひ続けてほしい。	・全学年での算数科ボランティアの一層の活用(低学年、学期末のミニチャレンジ、定規の使い方、中学年:コンパス、分度器の使い方、そろばん、高学年:分数のかけ算、わり算、単位換算、体積の単位、割合と百分率の定着のための練習問題の補助)
	補充学習	①基礎基本の定着をめざし、朝の学習を充実させる。 ②チャレンジタイム(4年～6年を対象に、個々の習熟度に合わせた学習を各教室に分かれて行う算数の補充授業)をする。 ③夏休み楽しい算数教室(全学年を対象とした算数の補充学習)をする。	①火・水・金曜日の朝の学習時間を活用し、算数、国語の基礎学力の定着をはかる。月・木の朝の学習時間を活用し、読書、読み聞かせに取り組む。 ②チャレンジタイム・月6限・年間11回 ③夏休みの算数教室 5日間	①全校統一で火・水・金は国語・算数(かかな・漢字の前倒し練習、百マス計算、基本問題等で基礎基本の定着を図った。月・木は読書と読み聞かせで学習のリズムと読書活動の推進を図った。(目標値:年間100冊) ②4～6年生でチャレンジタイム(算数補充学習)の実施。4/26、5/24、6/21・28、7/12、10/25、11/22・29、1/31、2/21・28 ③夏休みの算数教室 5日間実施 7/26～30	①一日の学習リズムを作る上で非常に有効であった。読み聞かせボランティアや職員、高学年児童による読み聞かせ、多様な読み聞かせやひとり読み等による取り組みが、読書活動の推進につながった。 ●業間の読み聞かせについては、担当者任せになってしまい、参加人数が少ないことがあった。担任からの声かけをはじめ、ボランティアさんとの連携が必要である。 ②③計画的に実施でき、児童にも定着してきた。 ③学習支援が必要な子どもに対して、出張等で担任が関われないことがあった。日程の調整を含め計画的に、より効果的な方法で進める必要がある。	○4～6年のチャレンジタイム、2年のミニチャレンジタイムは効果的な取組である。たぐさんのプリントに意欲的だった取組の様子もまたちの姿が見られた。ボランティアさんにも真剣に関わっていただけた。 ○わからない子どもが気兼ねなく質問できるところに良い点がある。習熟度別に分ける場合は、子どもたちに優越感、劣等感を持たせないような配慮をお願いしたい。 ●「計画的に実施でき、児童に定着してきた」という評価は、もっと具体的に成果を表し、課題検討もすべきである。	・夏休みの算数教室では、担任が中心に関わるよう、学年間で期間に幅を持たせる等、工夫を図る。 ・低学年のミニチャレンジの実施 ・成果の検証と課題検討
	キャリア教育(すずか夢工房・職業体験学習)	①夢工房や出前授業を活用し、さまざまな方と出会い、そのことを通して、生き方や考え方を学ぶ。	①夢工房、担任一人一回以上の活用	①1年:6・10月音楽療法(桐生先生)、1月信綱かるた(加藤先生:佐佐木信綱朗彰)、2年:10月音楽療法(桐生先生)、1月信綱かるた(加藤先生:佐佐木信綱朗彰)、3年:5月書道(樋口先生)、12月水墨画(直駐先生)、4年:1月短歌作成(川北先生:佐佐木信綱朗彰)、5月出張ゴミ博士、1月伊勢産物(伝統産業会館)、5年:10月水墨画(直駐先生)、6年:5月話し方(浜田先生)、2月防煙教室(渡辺先生)、音楽科:6月合唱(GGアンサンブル)、10月合唱(桂先生)、10月名芸大コンサート、1月ミニオア	①「夢工房」事業の各学期1回という数値は達成できなかったが、優れた技術や達人の生き方・考え方の多くのことを学ぶことができた。 ○名古屋芸術大学の方々にによるコンサートやミニオアなど本物の芸術活動について、学校の教育活動において体験できたことはキャリア教育の一環として大変意義深い。また、6年生の陸上競技や4年生のゴミ問題から環境を考える取り組みなど実生活に直接関連する学習については、今後も継続していきたい。	○「夢工房」の達人の授業は、すばらしい内容であり、子どもたちを惹きつけるものであった。達人たちに出会わせるのは教師次第。もっと積極的に取り入れたい。 ○学校医、歯科医、薬剤師の先生方の授業もすばらしい。多くの保護者や地域住民に参観していただきたい。	・校務分掌へのキャリア教育担当者の位置付け ・「夢工房」事業をはじめ、様々な出前授業を活用したその道の達人たちから「生き方・考え方」を学ぶ取組の推進
基本的な生活習慣の定着	①ノーテレビデー運動の継続 ②食育の推進 ③早寝・早起き・楽しく(プラスワン)朝ごはん運動の推進	①道徳等全学年で学年の実態に応じて行う。 ②各学年食育の授業を実施 ③学校医による出前授業10回 ④学校保健委員会年3回	①ノーテレビデー運動7月強調週間の取組み:達成率88% ノーテレビデー運動冬休み強調週間の取組み:達成率42% 児童を対象とした生活アンケートより、年間をとおしたノーテレビデー運動への取組みの達成率は、61.29% 2年生:「焼きもパーティー」11/5 2年生:「おいもパーティー」12/3(栄養教諭招聘) 5年生:「田植え」4/21、「稲刈り」8/27、「新米パーティー」11/25 「桜豆パーティー」10/25 ②5年生「メディア学習」6/9、3年生「歯についての授業」6/17、4年生「歯についての授業」6/17、5年生「歯と咀嚼の授業」11/25、6年生「歯と咀嚼の授業」11/25、6年「防煙教室」2/23 ②第1回学校保健委員会6/9、第2回学校保健委員会11/10、第1回学校保健委員会2月予定	①年間をとおした達成率は61.2%にとどまり、今後も継続した啓発を図ることが必要である。ノーテレビデー運動の替え歌など、保健委員会の子どもたちの活動を通して啓発活動をする必要がある。 ○強化期間を設定し取り組みを行った場合は、達成率は高い。また、同運動に対して基本的な生活習慣の定着を図る意味でも、保護者の賛同も多く、継続的に取り組むたい。 ②地域の方々からのご理解と協力やボランティアさんの支援により、貴重な体験活動や実習活動を通して、食を美味しく、楽しく学習できた。日常の食生活にも興味関心を持ち、意識的に関われるようになると考える。 ③学年によって、学習状況にばらつきがあった。	●1月の「ノーテレビデー運動」の目標達成率が下がった理由を分析・検討し、今後の運動の展開に反映させることが図られる。こういうことは、家庭と学校を結び進めることに意味がある。先生たちも意識をもって取り組んでほしい。	・年間を通し、ノーテレビデー運動への意識向上を図るため、保健委員会での児童の活動による啓発活動を展開 ・学校三訓による、授業を学習指導要領に基づき、年間計画を作成し計画的実施 ・連絡帳を毎日きちんと書く習慣づけと保護者への働きかけ	
生徒指導	①あいさつ運動への取り組み ①いつも、元気よく大きな声であいさつできるようにする。 ②児童会目標や生活目標を意識し、学校生活の向上を図る。	①あいさつ運動 毎週月曜日実施 ②月ごとの目標にそった取り組み ③防犯ホイッスルの携帯点検 2月10回、防犯ホイッスル携帯100%をめざす。	①毎週月曜日に実施し、生活の基本として、あいさつの啓発を図った。児童を対象とした生活アンケートより、「教師や来客者へのあいさつができる」「はい」の回答59.7%、「ボランティアへのあいさつができる」「はい」の回答72.1% ②毎月の生活目標を設定し、掲示。一斉下校時の指導点検により、防犯ホイッスル携帯率は98%以上、10月と11月に100%達成。	①保護者を対象にしたアンケートからも94.5%が、あいさつできるような取組を求めている。児童の行動結果と一致することから、取り組みを継続するとともに、相手により感謝を込めた伝え方ができるように、さらに指導を求めたい。 ②防犯連れ去り訓練では、ホイッスルを使用した訓練を行ったが、携帯させることと「自分の身は自分で守る」とことを確認する指導を継続する。	●アンケートに対してPDCAサイクルを回すことが必要。 ●連絡帳は毎日見ているか・平均58.9%はあまりにも低すぎないこと、連絡帳は、家庭と学校を結び重要なものであり100%であるべき。対策を講じて改善を図らなければならぬことである。 ○放課後、公園や神社で遊んでいる子どもたちも必ず赤い帯を携帯している。指導が行き届いており感。	・自分からあいさつする指導の徹底 ・ホイッスル携帯率100%維持。また、訓練等での使用法も伝え、「自分の身は自分で守る」ことの指導を徹底する。 ・防災訓練、引き取り訓練等の計画的実施 ・生徒指導部の構成(学年部各1)	
人権教育	①身の回りにおける様々な矛盾や不合理、差別を見抜き、差別を許さず、あらゆる差別をなくそうとする実践力を持った児童の育成をめざして、職員の研修を深める。 ②人権学習に各学級で取り組み、多文化共生教育、特別支援教育、平和教育、命の学習を進める。	①人権教育研修会を行う ②特別支援教育の視点を生かした授業改善を進める	①5/19パンドスカー研修会(人権教育課・植村先生)、ノ教職員研修会(陸先生)、6/16実態交流会(見守っていたい子どもについて)、8/4天中校区人権講演・交流会(陸先生)、8/12実態交流会(見守っていたい子どもについて)、12/22「フォーラム平和三重」の遠流学習会(陸先生) ①平和の祈りパネル展10/19～21 ①「みんなちがってみんないい」の発行3回 ②セルフチェック項目を確認し改善を図った。	○①支援が必要な児童に対し、学校全体で定期的な時間を確保し情報共有することは、校内研修進める必要不可欠である。また、多文化共生教育を推進する上で、陸さんの講演と講演や外国人児童の保護者を招いての学びの場は、職員の研修や日々の児童へのかかわりにおいて大変意義があるものとなった。 ①○平和の祈りパネル展に加え、図書館での「沖繩戦のパネル展」、平和に関する図書紹介、修学旅行での平和ミュージアムや移動展示「昔のくらし展」の鑑賞により、児童の平和への意識が高まってきた。	○外国籍の児童の支援体制を継続し、学童保育所等との連携も一層進める。	・人権学習について、保護者や地域への公開・伝達の一層の推進 ・天中校区の実態交流会の持ち方について、より実践的で効果的な方法を見出す。 ・多文化共生教育を中心に据える。 ・必ず教師の思いや考えを子どもたちに語る。 ・教職員の研修を子どもに還元する。	
地域との連携	①学校支援地域本部事業の推進をはかり、地域との連携を深める。 ・「子ども見守り隊」による安心・安全のサポート ・「おかえり」見届け隊 ・学習ボランティアの学びのサポート・地域の方々による学習支援	①学校だよりの地域回覧。 ①学校行事の案内や招待。 ①地域コーディネーターとの連携。	①12月終了時点で27項目 ①学校支援ボランティア登録人数89名 ①スクールコンサート4回、運動会、学校医先生の講和等 ①地域コーディネーターの年間活動時間:280時間	①地域コーディネーターにより、ボランティア活動記録や担任との打合せが円滑に進められた。 ○保護者を対象とした生活アンケート結果より、「学校だより」で見ている」との回答は93.8%であり、学校の状況を理解していただくのに大変有効であった。 ○運動会等の体育的行事やスクールコンサート、ボランティアさんへの感謝の会などで地域の方々との交流を持つことができた。 ○保護者を対象とした生活アンケート結果で、子ども見守り隊や安全サポートの活動について、96.1%の周知が確認できた。	○地域に「学校だより」を配布・回覧していることは非常に良い。学校と地域を結び大切なツールとなっている。また子どもたちが地域に出て、総合学習で調査したり、地域の人々と接する機会が多くなり、顔見知りになることで子どもたちの安心・安全、あいさつ運動の定着にもつながる。 ○3年生の公民館サークルへの参加は、地域に学び続ける大人がいることを知る機会となり、生涯学習のスタートともなる。 ○スクールコンサートは大変素晴らしい活動であった。	・「学校だより」を地域づくりに生かせる積極的取り組みを一層積極的に行なう。 ・学校だより、学級通信を積極的に発行する。 ・学校行事を積極的に公開する ・公民館や地域の施設に対し積極的に関わりをもち、行事への参加を呼び掛ける。	